C—22　古代（縄文時代）の編みについての一考察

実践女子短大　樋口富枝　○船崎恵美子

目的　編み物（手編み、機械編み）が装飾的編み物から実用的服飾全般にとりいれられ型紙使用の編みまで普及し進歩している。明治以後に輸入された編み物（西洋編み物）が日本婦人の手先の器用さが役立ち家内工業的にも発展をみているが、古代の編みについては多くは知られていない。織物が作られる前の組み、そして編みがどの様に作り出され生活の中に取入れられ、現在の編みに残されているかにつき考察する事を目的とした。

方法　古代の植物遺物皆無といわれているので実物による考察は望めない為文献により史的立場から追求をこころみた。

結果　衣服の形については土埴より推測ができるが、材料については知る事はできないが、狩猟生活社会といわれていたこの時代は毛皮を着用していた事は、針の遺物からみても推測できる。即ち接ぎ合わせる技術が存在していた事がうかがえる。結びはそれ以前から使われ狩猟用具、農具の中にもみられる。

植物採集生活から農耕生産生活に移り植物材料の使用が多く、太さの変化、撚る事による強さを持たせ、材質により組み、編みを変化し作られている。これらが日常生活用具の中に多くみられ、現在でも民具民芸品として普及し保存されている。